

農家の余剰労働力についての諸説整理

農林水産省農業総合研究所

明石光一郎

農業部門に余剰労働力(surplus labour)すなわち限界生産力がゼロの労働力が存在するか否かについては、農業経済学者や経済発展論者によって多くの議論がなされてきた(ヨトポロスとヌジェント(1976))。

余剰労働力が存在するとする立場の代表的研究としてはヌルクセ(1953)がある。さらに、アーサー・ルウィス(1954)により提唱され、ラニスとフェイ(1961)によって精緻化された農村部門から都市部門への無制限労働供給の理論は、経済発展理論の古典的業績とされているが、そこでは農業部門の労働の限界生産力がほぼゼロであると仮定されていた。

これらに対して農業部門に限界生産力がゼロの労働力は存在しないという説もヴァイナー(1948)、ハーバラー(1957)等によりだされた。とくにシュルツ(1964)は限界生産力ゼロの神話に決定的な疑いを示す研究を発表したとされる(鳥居(1979))。彼は1918-19年にインドでインフルエンザが大流行したときに全人口の6%が死亡したにもかかわらず(農村部の経済活動人口の死亡率はもっと高く8%程度であったとされる)、1919-20年に農作物の作付け面積は僅か4%程度しか減少しなかった事実をもって、インドの農業に余剰労働力は存在しなかったと結論づけたのである。また、ジョルゲンソン(1961)は新古典派の立場から農業部門の労働の限界生産力はゼロでないとするモデルを展開した。

それ以降、農業部門の労働の限界生産力については、それがゼロでないという主張が優勢になった。経済発展理論の包括的な展望論文であるヨトポロスとヌジェント(1976)は、限界生産力がゼロの労働力は特殊な例外を除いて存在しないと主張している。その主張はシュルツ(1964)の実証的分析の他にも、セン(1966)、スティグリッツ(1969)、ゼラムカ(1972)等の農家の主体均衡理論による分析結果に基づいていると思われる。

本報告では農家の余剰労働力に関する議論の流れを整理し、代表的な研究を紹介するとともに、問題点の指摘を行う。

[主要文献]

Lewis, W. A. (1954) "Economic Development with Unlimited Supplies of Labour", *Manchester School of Economic and Social Studies*, 22, 139-191.

Ranis, G., and J. C. H., Fei (1961) "A Theory of Economic Development", *American Economic Review*, Vol. 51, pp. 533-565.

Sen, A. K., (1966) "Peasants and Dualism with or without Surplus Labor", *Journal of Political Economy*, Vol. 74, pp. 425-450.

Schultz, T. W., (1964) "Transforming Traditional Agriculture", Yale University Press.

鳥居泰彦, 1979「経済発展理論」, 東洋経済新報社.

Yotopoulos, P. A., and Nugent, J. B. (1976) "Economics of Development" (鳥居泰彦訳, 1984「経済発展理論—実証研究—」慶應通信).

Zarembka, P., (1972) "Toward a Theory of Economic Development", San Francisco: Holden Day.